
青空流星群

優音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青空流星群

【Nコード】

N3449Z

【作者名】

優音

【あらすじ】

幼なじみの物語です。

藍依、帝兔、裕磨の三人の視点から物語が動いて行きます。
変わりたくない藍依、変わって行く帝兔と裕磨…。
青春の淡い恋の物語です。

プロローグ

「ねえ、星座ってなんだろう、星って何？光は？」

しし座流星群が満天の星空を泳ぐように流れて…。

そんな夜空の下、私は問いかけた。

「星は一つ一つに物語があって、その物語を一目でわかるように表したのが星座。」

光は

あれ？

光はなんだったつけ？

皆で天体観測をした日から、どんどん遠ざかって、ずっと続くはずだった時間は色を変えた。

こんなんじゃないのだったのに。

もう戻れないのかな…。

(ジリリリリ…)

目覚ましの音で我に返る。

今日も慌ただしい一日が始まる。

プロローグ(後書き)

最初は短めです。

幼馴染み（前書き）

藍依視点から始まります。

幼馴染み

「藍依、お早う。」

私、こと南雲藍依は、華暉高校に通う一年生。
最近悩んでいます。

「お早う帝兔。」

私に挨拶してきたのは幼馴染みの上遠野丘 帝兔。

「裕ちゃんは？朝練？」

「ここにいるよ。」

にっこり笑って手をふつたのが、白石 裕磨。

私はちっちゃい頃から『裕ちゃん』って呼んでるけど…。
裕ちゃんはもう嫌かな？

前までは帝兔も『みーくん』って呼んでたけど、もうそろそろ普通に呼べって言われちゃった。

「藍依、俺もそろそろ…。」

あ、やっぱり言われちゃった。

「裕ちゃんはやめて？」

「わかった…。」

やっぱり恥ずかしいのかな…。

そうだよね、高校生になってまでちゃん付けなんて恥ずかしいよね…。

「じゃあまたあとでな。」

クラスの前で帝兔と別れる。

私と裕ちゃ…裕磨はB組だけど、帝兔はD組だから。

A-Jまでクラスがあるわりには、離れなかった方だと思うけど…。
それでもやっぱりクラスが離れちゃうのは悲しい。

「そうだ藍依、これ。」

裕磨が何か渡してくる。

「これ…いいの!？」

それは、この前三人でお店に入った時私が欲しがった猫の小さいぬいぐるみ。

「藍依、こればっか見てたから欲しいのかなって思ってたさ。」

女の子の欲しいものの把握できるなんて…きっとモテるよ裕磨!!

「ありがとう、大事にするね!!」

思わず抱きつきたくなったけど我慢我慢。

優しい裕磨はやっぱいろいろんな人からモテるから。

一回、彼女疑惑掛けられて大変だったし。

裕磨はフランス人とのハーフで、お母様譲りの綺麗な金髪に深い青の瞳を持つてる。

おまけに、お父様譲りの背の高さがあるからモテるモテる。

もう、ここまで言ったら美形なのは言わなくてもわかるよね。

「どうしたの？」

俺の顔、なんかついてる？」

「うん!!そんなんじゃないよ!!」

見とれて悪いかっ!!

このイケメンハーフ!!

「藍依、見てみて!!」

そう思ってたら後ろから声かけられましたよ。

「じゃあね裕磨。」

「うん。」

裕磨に手を振ると、声の主、滝本たきもとあかり 緋梨の方に駆けてきます。

「どうしたの緋梨。」

「いやあ、朝からお熱いね。」

私邪魔だったかな？」

ちよ、からかわないで下さいよ緋梨さん。

照れるじゃないですか…って違いますよ?

そんなじゃないです。

「そんなんじゃないよ。」
「って言うか用件どうしたよ。」

心の中でツッコむけど、声には出しません。

だって用件そっちのけでコントになっちゃうからね！！

「あ、そうそう。」

今つぶやいたー見てただけで、こんなのが乗っててね。」

緋梨つぶやいたーやってるんか。

それはいいとして…え？

『帝兎君の好きな人発覚なう。』

って…。まあ揃いも揃ってうちの幼馴染みはモテるよ。

何でリアル充実してないんだか。

「でね、リンクに飛んでみたら、これ。」

『南雲藍依』って私じゃん！？

「緋梨、多分これいたずらか何かだと思うよ。うん。」

だってあり得ないもの。

まあ騒ぐには格好のシチュエーションだもんね、幼馴染みなんてさ。

「何の話？」

「あ、裕磨。これ。」

緋梨の携帯を見せると、裕磨は笑ってから私の方を見た。

「帝兎にURL送ってみようか。」

裕磨は悪戯好き。

こついうとこで乗ってくるから楽しいけど…。

たまに度を知らないから怖い。

「ん？」

携帯が鳴る。

相手は裕磨らしいけど…URL？

「なんだ、悪戯か。」

『俺に想い人なんていねーよwwww』と書き込む。
まったく…人の恋愛話なんかして何が楽しいんだか。
それにしてもよく気づいた…かな。
ま、否定しとかなきゃ回りが回りだし。

…大体裕磨も裕磨だ。

いつまで友達のフリなんて続けてるんだか。

まあ、『彼奴が望むから』何て言ったら終わりだけど。

変化と不変

「裕磨、藍依、帰ろうぜ。」

B組の教室まで来ると二人に声をかける。

「ごめん帝兎、私緋梨と遊ぶ約束したんだ。

先帰っててくれる？」

そっか、もう高校生…か。

中学生の頃は規則に忠実で寄り道なんて一切しなかったのに、そんな藍依が『寄り道』なんて言うと、しみじみ来るものがある。

「おう、気を付けるよ。」

「うん。」

藍依は子供みたいだ。

本人に言ったら怒られるけど、やっぱり子供みたいだと思う。

いつまでたつても変わらない。

本当なら、例え幼馴染みだって昔と何一つ変わらず接したりなんかしない。

なのに藍依は何一つ変わらない。

時が止まったとでも言うように。

「帝兎？」

「ん？」

裕磨に呼ばれ、思考回路を止めて我に返る。

「考え事？」

小さく頷く。

聞いてみるか。

お前の時間は動いてるんだろ？

「裕磨はさ、藍依の事好きか？」

裕磨の横顔が目を閉じる。

裕磨は、男でも惚れるくらい綺麗な顔をしている。

金髪が風に揺れて…。

青い瞳が俺を見る。

「うん。好きだよ。」

おとぎばなし
お伽噺や少女漫画に出てくる王子がもし実在するのならば、それはきつと裕磨のような存在だと思っ。

絵にかいたような整った顔に強調されたサファイアにも似た深い瞳は、中世のヨーロッパにありそうな王族の服がよく似合う、理想の王子の像だ。

「そっか…。」

『俺も。』…なんて、裕磨には言わなくともわかる筈だ。

俺は充血したように真っ赤な瞳で、髪も黒くて面白味がない。

だから、裕磨と言う存在は架空から姿を表した俺の理想の姿なんだ。少し長めの髪だって栄えるほどぴったりで、うっとおしさを感じない。

ハーフと言うだけでこんなにも変わるだろうか？

「負けないよ、帝兔。」

数歩先を歩いていった裕磨が振り替えて笑っ。

赤い夕日に照らされて、裕磨の金色の髪に赤い輪郭が写る。それがとても絵になる風景で、勝てる気なんてしなかった。

『負けない』だなんて自分で言っておきながら、夕日に照らされた帝兔を見て思っ。

きつと勝てないんだろうと…。

黒々とした髪の下から覗く赤い瞳に少し見とれる。

俺とは正反対だ。

髪は漆黒の闇のよう、そこから覗く赤い瞳はひとつの灯火のように怪しい。

俺はそんな帝兔が羨ましい。

昔から金髪の髪のようにせいで虐められていた俺は、そんな帝兔の髪を羨ましく思った。

自分の髪は嫌いじゃない。

でも、帝兔の髪はもっと好きになれる。

俺の理想の姿だから。

「藍依、これ可愛くない？」

『たまには良いでしょ？』なんて言っつて、緋梨が買い物に連れ出してくれた。

「本当だっ！！」

買い物：か。

なんか楽しいな。

三人ではよく行くけれど、二人とも男の子だからあんまり女の子らしい物が売ってる所とか、あと服屋とか、二人が退屈しそうな所は行けないから…。

だからこうやって、女の子の緋梨と買い物に行けるのはすごく楽しい。

「緋梨、洋服も見に行こうよ！！」

「わかったつてば藍依、焦らなくなつてちゃんと見れるよ。」

「一杯買ったね。」

さすがに服は高かつたから、アンティークの小物とポーチと髪飾りをいくつか買った。

「藍依。」

緋梨が急に真剣な顔つきになる。

「本題なんだけどさ。」

何でだろう。

緋梨のこんな真剣な顔なんて見たことないのに、今日はすごく楽しかったのに…。

緋梨のその言葉に、私は逃げ出したくなった。

変化と不変（後書き）

男の子2人は赤眼と青眼です。

なんでって格好いいからでs()()

藍依の目はご想像にお任せしますが、時期出て来ると思われます。

あ、ちゃんと考えておかなきゃwww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3449z/>

青空流星群

2011年12月25日23時53分発行